
グリーンフィードを手に入れろ！

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンシードを手に入れろ！

【Nコード】

N1046Z

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

マミ・ほむら・さやか・杏子の四人はグリーンシードをかけてなぜか麻雀をすることになった。

勝負はマミがさやかに満貫を振り込むという波乱含みの展開から幕を開けた……。

軽いギャグ調のまどまぎSSです。

麻雀をご存じの方はもちろん、ルールすら知らないという方も、軽く笑えるお話になっております。

（前書き）

まどマギのいろんなネタを使用した、軽いギャグ調のお話となっております。

懐石料理や高級フレンチのような素晴らしいSSだけではなく、ジャンクフードもたまにはいいかな、といった方におすすめです。

登場人物紹介。

巴マミ：ベテラン魔法少女。一応本編の主人公。

麻雀も雀歴3年と、魔法少女の中ではベテラン（スタイルに騙されがちだが、彼女は中学3年生）。

下手ではないが、理不尽で流れ弾的な振り込みが多い。

運命なのだろうか。

好きな役は平和。

美樹さやか：新米魔法少女。

麻雀も初心者。

理解してる役がリーチとタンヤオと役牌だけであとはうる覚えという恐れ知らず。

好きな役はリーチ。

暁美ほむら：謎の美少女魔法少女。

雀歴は不明。

とにかく手堅い麻雀を好む。

好きな役はタンヤオ。

佐倉杏子：利己主義的なベテラン魔法少女。

強引に食う（ポンチー）麻雀を好む。

タコ鳴きから大物手を目指していく雀風なので一見へぼく感じるが、押し引きの計算がしっかりしていてオリがうまい。

好きな役は一色手。

土曜日の夜9時。

魔女が跋扈し始める時間。

4人の少女が、マミの部屋に集まっていた。

この部屋の主で、大きなドリルヘアが特徴的な美少女巴マミ。

ショートカットがよく似合う元気少女美樹さやか。

黒のロングヘアが美しい寡黙な少女、暁美ほむら。

そして……。

「ルールを確認するぞ」

長い髪をポニーテールにした少女が、重々しく3人の少女たちに確認をとった。

少女たちが全員、首を縦に振る。

「ルールは東風戦でアリアリ。喰い替えは認めない。国士の暗槓の加槓も認めない。おk？」

『うん』

3人の声がハモる。

「さて……肝心のレートだが」

ポニテの少女……佐倉杏子のその一言で、場が一気に緊張感に包まれる。

「トップはラスからグリーンシードを2個もらう。2位は3位からグリーンシードを1個もらう。まさに弱肉強食、食物連鎖ってやつだ。おっと、『非処女』は0・5個で計算だ。いいか？」

少女たちは顔を見合わせ、「じゃあ、それで」と確認を取り合った。ちなみに非処女というのは、一回でもソウルジェムの汚れを取り除いたことに使用したグリーンシードのことである。

まあ、一種の業界用語みたいなものだ。

それに、言いて得て妙でもある。

で、麻雀を打つだけなのに、なぜかみんな魔法少女の服装だった。グリーンシードを取り合う麻雀だけに、みんなそれだけ真剣だ、ということであろう。

決して、作者の趣味ではない。

ええ、それはもう。

「じゃあ、場所決めだ。好きな牌を取りなよ」

杏子は手の中に握っていた4つの牌を、卓の上にそっと置いたのだった。

東一局0本場 親…マミ ドラ9s（※注 p…ピンズ m…マンズ s…ソーズ）

場所決めと親決めの結果、起親はマミに決まった。

マミ配牌

2m 4m 3p 4p 8p 1s 3s 4s 6s 白 南西

（好調ね）

タンピン系の軽い手だ。

巡が進めばクイタンでもいい。

メンゼンで手が伸びれば3色まである。

赤が来ればインパチさえ期待できる。

となると、もう役牌の重なりには期待しなくてよい。
マミは白から切り飛ばす。

「ポン！」

いきなり鳴いたのは北家の杏子。

彼女はとにかく、食うのが好きだ。

タコ鳴きから大物手に育てていくのが、彼女の流儀らしかった。

1巡目鳴きはタコっぽいが、いつものことなので誰も気にしない。

杏子の鳴きはあったが、それ以外は平坦に巡が進んでいく。

南家のさやかも西家のほむらも、何の変哲もない捨て牌だった。

さて、7巡目。

マミ捨て牌…白（杏子ポン）南西1s1s中

2 m	3 m	4 m	1 p	3 p	4 p	6 p	7 p	8 p	2 s	3 s	4 s	6 s
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

（うん、ほぼ理想的な最終型ね）

できれば出来上がりサンショクが良かったが、それは高望みがすぎるというものだ。

「リーチ」

お姉さんらしく、マミは優雅な手つきで1pを切り、10000点棒を点箱から取り出して場に置いた。

「あっ、あたしもリーチ！」

ばすっ！と赤5sを切って、同巡にさやかもリーチに来る。

（赤切って追っかけか……。ドラのアンコでもあるのかしら）

親のリーチに対して、ど真ん中の赤切りリーチ。

ほむらと杏子はベタン、とあっさり現物で降りてしまったようだ。

（さっさと上がって……。！？）

マミツモ…7p

さやか捨て牌

東西1s1p2s白 リーチ赤5s

（くっ……。通せ！）

バシッと少し強めの打牌。

「あっ、マミさんすみません、それですっ！ロンッ」

初心者らしく、たどたどしい手つきでぱらっ、とさやかは手牌を倒した。

さやか手牌

3m4m5m 2p2p2p 7p8p8p 9p9p發發ロ
ン7p

「なっ、なにそれっ！？」

開かれたさやかの手牌を見て、マミは素っ頓狂な声を上げてしまった。

「あ、あれえっ!? なんかあたし、間違いましたか?」

「いや、チョンボじゃないけど……」

親リーの一発にあれだけの超危険牌切ってきて、イーペーコー絡みのペンチャン待ちで追っかけて……。

「えーと、リーチソクイーペーコー……だっけ? この形?」

指を折りながらゆっくり翻数を数えているさやかの質問に、ほむらと杏子がうなずいて答える。

「裏ドラは……あっ、いつこのった! ラッキー! 4つ指が折れたんで、マミさん、8000点です!」

「……はい」

世の中の不条理を嘆きながら、マミはさやかの左に8000点を差し出したのだった。

現在の点棒状況

トップ…さやか	33000点
2位…ほむら	25000点
3位…杏子	25000点
ラス…マミ	17000点

東2局0本場 親…さやか ドラ9p

南家マミ配牌

東南西 北中1 m 2 m 5 m 2 s 5 s 8 s 1 p 8 p ツモ9 p

「……………」

ひどい手である。

ドラが1個あるのが救いか。

（ああ、神様。こんな人生だったんです。手牌ぐらい、いい夢見させてくれてもいいんじゃない……）

心のなかでつぶやくマミ。

ってかそれ、あなたのセリフじゃないですよね？

嘆いていたって仕方ない。

これ以上苦しい状況は、魔女狩りの中でいくらでもあった。

マミはポーカーフェイスを装いながら西から切り飛ばしていく。

割と平穏な感じで巡目は進んでいき、7巡目。

マミ手牌

1 m 2 m 3 m 8 m 9 m 3 s 5 s 7 p 8 p 9 p ポン南（南）

南 ツモ7 p

「……」

やっと字牌処理が終わり、ちょっと手が進んできたかなと思っているとこの重なりである。

（頭がないのね……）

マミさんそれ、死亡フラグですよ。

ともかく彼女は、雀頭がない、ってことを言っているのである。

7 pを雀頭にして8 p 9 pを切り飛ばしていくか。

ドラが9 pでなかったらそれが正着だろうけど……。

それともツモ切りか……。

仕方ない。

ここはシャンテン維持で妥協しましょう。

心のなかでため息をつきながらマミが7 pをツモ切ると。

「……ロン」

静かに、対面が声を発した。

ばららっ……と綺麗な旋律を伴って、ほむらの手牌が倒れる。

ほむら手牌

白白白 2 m 3 m 4 m 7 m 7 m 8 p 9 p 3 s 4 s 赤5 s 口
ン7 p

「!!」

「白ドラドラ。5200」

「は……早い……。この巡目ならリーチかと思ったわ」

「……7巡目以降の悪形・ゴonzはダメテンって決めてるから。6
巡目ならリーチ行くけど」

……何やら、ほむらシステムがあるらしい。

（なっ……！どうして私の身にばかりっ……こんな理不尽なっ……！）

マミの中で何かが弾けそうだった。

ともかく彼女はなんとか理性を維持し、対面のほむらに点棒を投げつけるなんてことはしないで、5200点をほむらの前にそっと置いたのだった。

現在の点棒状況

トップ…さやか	33000点
2位…ほむら	30200点
3位…杏子	25000点
ラス…マミ	11800点

東3局は流局し、さやかテンパイ（リーチ棒保留）・ほむらテンパイ・杏子ノーテン・マミノーテンの結果だった。

オーラスの点棒状況

トップ…さやか	33500点
2位…ほむら	31700点
3位…杏子	23500点
ラス…マミ	10300点

東4局1本場 オーラス 親…杏子 ドラ發 供託1000点

「ああ、今日はついてねえ。一回も上がってない」

杏子はそんなことをつぶやきながら、シュガーシガレット（あの、砂糖でできたタバコのようなお菓子ですね）をポリポリかじりながら、ばしっ！と配牌から赤5sを切り出した。

麻雀を打つとき、彼女はいつもシュガーシガレットを口に咥えている。

ま、年齢的にタバコは吸えませんかね。

「あら、それなら私は一体どうなるの？」

怒りを抑えながら笑顔を作るといふ、プロのOLでもなかなか難しい技をマミは披露しながらこちらまけじと赤5pを切った。

マミ手牌

南南南 1m 1m 2m 2m 4m 6m 7m 7m 4p 東

（最後の最後でチャンス手が……！ なんとかしても、モノにするわ！）

ラスはグリーンフィードを2つ失う。

絶対に避けなければならない。

3位の杏子との差が13200点。

苦しい点差だが、マンチョコなら楽に、マンツモでも杏子が親なので、供託点・1本場を含めぎりぎりひっくり返る。

満貫が手作りの最低ラインだ。

ハネ満まで手が大きくなれば、さやか・ほむらから直取りで2位までである。

さやかは、まだオリを知らない。

手さえ整えば、その可能性は充分にあった。

「赤5 pか……ポン」

早速、杏子が動いてきた。

杏子はアガリ点に枷がない。

ラス親なので、とにかく連荘すればいいのだ。

2900でも上がっておけば、ラスが遠のく上、次局でトップも見えてくる。

(く……)

これが普通の局面なら、親の手が少し進んだぐらいで焦りはしないが、今のマミはスピードと打点という、二律背反しているものを要求されている。

焦っても仕方ないと頭では分かっているけど、反応する身体はごまかしようがない。

綺麗な頬はうっすらと赤らみ、牌は汗まみれになっている指から逃げていこうとする。

手が進まない。

大物手なのでなかなか進まないのはわかりきっているが、やはり、焦る。

そんな魂が凍てつくような数巡が過ぎ……

マミ手牌

南南南 1 m 1 m 2 m 2 m 3 m 4 m 6 m 7 m 7 m 東 ツモ
8 m

「……」

東はション牌である。

もう巡目も6巡目だ。

あれから杏子は動きを見せていないが、あまりに気持ち悪い。
だが。

ばしっ！

マミは東を切り飛ばした。

怖くても、前に進まなければいけない時がある。

「……ポンだ！」

杏子も気合の入った発音と手つきでそれを食った。

そして、2巡後。

マミ手牌

南南南 1 m 1 m 2 m 2 m 3 m 4 m 6 m 7 m 7 m 8 m ツモ
3 m

たどり着いた。

テンパイに。

ロン和了でもハネ満。

赤をツモれば倍満まである。

これが私、巴マミの麻雀だ……！

ティロ・ファイナレ
「リーチ！」

裂帛の気合を込めたリーチ。

「う……うん……捨ててる牌でロン、って言われないんだよね。確か……」

「……くっ……仕方ないわ……」

その気合に押されたか、さやかは戸惑いながら、ほむらはくちびるを噛んでマミの現物を切った。

さやかはともかく、ほむらは勝負手だったのかもしれない。

「……ふんっ！リーチが怖くて魔法少女やってられるかつ！」

バンッ！！

杏子は本日10本目のシュガーシュガレットをボリッ！と噛み千切り、ガリガリ言わせながら6mを強打した。

当然のことながら、マミの捨て牌はマンズのホニイツの匂いが強く漂う、異常な捨牌である。

「……強いよね。大きな手が入っているのかしら？」

「いやいや、心配しなくてもあんたのおっぱいほど大きくないさ」

そう言う杏子は、まるでセクハラオヤジのようないやらしい笑みを浮かべた。

「……あら、そう」

好きに言うっておけ。

ここで決めてやる。

マミ、一発目のツモ……。

「!?!」

最初は1Sかと思った。

いや、本当はツモった瞬間、わかりきっていた。

もう麻雀も魔法少女も、やり始めて3年以上である。

「いやあっ!通して!」

ぼろり、とマミの白魚のような指からこぼれ落ちたのは……ドラの『發』だった。

「!?!すまん、マミ!そいつだ!」

どんっ!と大きな音を立てて杏子が手牌を倒す。

杏子手牌

發2 p 2 p 2 p 9 p 9 p 9 p ポン5 p 5 p (赤5 p) ポン

東東(東)

「ダブ東ホンイチトイトイドラ3! 24000は一本場の24300!」

「……私のバストってオヤバイより大きいわけ……?」

それだけ言い残して、マミはボタンキューと、卓に突っ伏してしまっただった。

さて、無事(?)に東風戦も終わり、いよいよ精算である。

「おいマミ、足りないぞ」

トップだった杏子が、渋い顔でマミに迫った。

受け取ったグリーンフシードが新しいのが一つと、1度使ったものが1つだったからだ。

ちなみにほむらは表情ひとつ変えず、「はい」とさやかにグリーンフシード1個を手渡して、さっさと帰ってしまっていた。

「……今、手持ちがそれしかないの。今度の魔女狩りで返すから……。『非処女』のグリーンフシードは利息がわりにとっておいて……」

マミの類まれな美貌を誇る顔は、ボロ負けを喫したショックからなのか、気の毒なほど真っ青であった。

「ちっ……そういうんなら今日のところはこれで我慢するか。じゃ、早く返せよ」

「じゃあ、マミさん。今日のところはこの辺で！」

勝ち組の二人は、意気揚々とマミの部屋から出ていった。

みんなが帰ってからどれぐらい経っただろう。

マミはふらふらと卓の前から立ち上がり、ほうほうの体でベッドまでたどり着くと、魔法少女の服装も解かないでぽてちん、と倒れこんでしまったのだった。

その時の様子を見ていたQ・B（仮名）氏の証言。

「よく彼女たちはこんな四角い石ころみたいなもので自分の命がか

かっているグリーンシードをやり取りできるね。わけがわからない
よ」

（後書き）

最後までお読みくださいまして、誠にありがとうございます。

少し前に数作品投稿させていただいたのですが、自分でも納得行かない所がありましたので、少ないながらもいちゃった読者様に変申し訳ないと思いつつも、作品を削除させていただいたものです。

小説家になろう様似もご迷惑をかけることになるので、このようなことはしないほうがよい、とわかっていたのですが……。

しがないながらも、SS作家の業としてなにとぞ、お許しいただければと思います。

今回はかつこをつけず、自分の思うまま、好き勝手に書いてみました。

こう書いたら読者受けがいいんじゃないか、とか、こう書いたら感動的だよな、なんて小細工はなしにしました。

前の作品は少し、実力に見合わない小細工に走りすぎてしまったくらいがありましたので……。

もし、あなたがこの作品を読んでクスリ、と笑えたり、なにか感じられる所がありましたら、ぜひ一言、応援ください。

それではまた、次の作品でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1046z/>

グリーンシードを手に入れろ！

2011年12月3日22時45分発行